

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No.36 2013年3月

外国企業支援	Japan Aerospace 2012〔国際航空宇宙展〕 メキシコ大使館商務部 (PROMEXICO) の通訳を行って ……………	2
自治体・中小企業支援	(株)パナソニックとの赴任前研修講座取り組み …………… やまぐち産業振興財団・首都圏事業化支援コーディネーターとしての活動報告 ……	3 4
教育	グローバル人材育成のための大学の取り組み …………… 津田塾大学での英語による講義 …………… 小中学校国際理解教室講師体験「イギリスに学ぶ」 ……………	5 5 6
留学生支援	ABICの留学生支援活動 ……………	7
私のボランティア活動	68歳からボランティア！ …………… キラキラな国のきらきら☆滞在記 ……………	8 9
エッセー	歌は世につれ年につれ ……………	10
新刊紹介	『貿易実務の基本と仕組みがよ〜くわかる本』 …………… 『貿易書類の基本と仕組みがよ〜くわかる本』 ……………	11 11
事務局だより	ABICホームページのご案内 …………… ABIC会員懇親会を開催 …………… 会員の種類 …………… 法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数 …………… 賛助会員入会のお願い ……………	3 11 12 12 12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

外国企業支援

Japan Aerospace 2012〔国際航空宇宙展〕 メキシコ大使館商務部(PROMEXICO)の通訳を行って

かんばやし こうへい
閑林 亨平 (元 トーメン)

旧トーメン時代に1990年から1993年までメキシコに駐在し、また旧トーメン時代は、ほぼ一貫して航空機部門(営業)に所属していたこともあったため、今回、ABICより募集のあったAerospace 2012でのメキシコ大使館商務部(PROMEXICO)ブース英語通訳に応募し、活動することになった。

同展示会は、4年に1度、大々的に行われる国際的な航空宇宙産業の展示会で、2012年は初めて首都圏を離れて中部国際空港・セントレアと名古屋港ポート・メッセ両会場で10月9日から14日まで6日間にわたり開催された(33カ国、660社以上が参加)。前半はTrade Dayとして業界関係者のみ、後半は一般客向けにPublic Dayと称して、実機展示・自衛隊ブルーインパルスのデモ飛行などが同空港内で行われた。私は、1995年に幕張メッセで行われた同展示会に、トーメンから参加企業として対応した経験がある。日本での航空宇宙産業の大きな展示会は4年に1度だが、英国(ファンボロー)、フランス(トゥルーズ)、米国(ディトン他)、シンガポール(チャンギ)などでは毎年行われており、過去何回か見学もした。また、インドネシア駐在時代のジャカルタ新国際空港記念展示会では、主催者側の関係者として参加したこともある。

このように展示会は勝手知ったものではあったが、初めてのPROMEXICOの通訳の仕事である他、メキシコ駐在時代にはほとんど航空機関連のビジネスを扱ったことがなく、同分野で知っている関連企業も政府機関もなかったため、通訳として活動を始めるに際しては一抹の不安を覚えた。ただし、一緒に活動いただけることになったABICメンバーで元伊藤忠商事の竹山さんは、以前から何度もPROMEXICOの通訳・アドバイス業務などをされた方で、気脈も良く通じておられ、スペイン語も堪能であることから、随所でアドバイス・ご協力を頂き、大変心強く、大いに助かり、おかげさまで期間中は全力投球ができた。

PROMEXICO関係者以外のメキシコ側出展参加者は、ハリスコ州などから4つの州代表、その他は航空機関連の民間企業があり、竹山さんが州政府を、私が民間企業の通訳



メキシコブースにて、PROMEXディアナさんと筆者

対応を行った。日本の自動車産業では、すでに多くの企業が同国に進出済みか、あるいは進出計画があるのにもかかわらず、日本の航空機産業は、欧米勢に比べると同国への進出は少ないのが現状である。一方、同国は、これまでの米州航空機産業におけるコスト的に比較優位な立場を利用した二次的な生産拠点の位置付けであった時代から脱却している。参加した州政府担当者は、いまや同国が北米の高度な先端・航空技術集積の拠点・投資先として最適地候補に成長した旨などを来客に熱心にPRし、企業誘致活動を行っていた。

今回ABICを通じて、かかる貴重な体験をさせていただき感謝するとともに、メキシコ航空機業界の今後のますますの発展を祈念してやまない。アニモ メヒコ!(メキシコ 頑張れ!)

(株)パナナとの赴任前研修講座取り組み

にしやま かつあき
西山 勝昭 (外国企業支援担当コーディネーター、元 住友商事)

2011年11月中旬、パナナ・グローバル事業部から、ABICの活動を知るところとなったということでコンタクトを受けた。まずは、同事業部が企業から委託を受けた中国への赴任前研修（受講者の会社の業態、赴任者の職位によってテーマを準備）への講師派遣要請がその目的だった。ABICには、中国ビジネスに高い識見、経験を持っている会員が多く登録しているが、講師候補者選定に当たっては、要請先がパナナでもあり、同社での候補者との事前面接など周知な準備を経た後、講師陣を決定した。その後、異業種企業の対象者向けに、中国への赴任前研修を今まで4回にわたり実施してきた。

ABIC派遣の講師陣の、実体験を交えた緊張感の保てる講義内容・手法については、受講者からの評判も高く、きめ細かくこの活動の実現に向けて準備してきた甲斐があって面目躍如たる思いである。一方でパナナ側では、異業種企業向け対象の赴任前研修講座を諸般の状況から、特定企業向けのクローズな形での【グローバルマネジメント・異文化コミュニケーション、交流】を主体とした講座受託に注力しよう、という社内コンセンサスになった。このため、その方針に沿って再度ABIC内で最適な候補者を募り、30人をショートリストの上、それをパナナに提出した。講師の選択に向け、書類選考を経て、講師候補者4人の事前面接をパナナ・対象会社・ABICで実施した。実際の研修【赴任前グローバルマネジメント研修】に至るまでかなり

の日時を要し、その間にも紆余曲折はあったものの、2013年1月15日、ようやくある有力通信関連機器メーカーの研修センターにおいて、講師を担当された野地会員による終日研修を成功裏に終了することができた。野地会員の周知な準備に謝意と敬意を表したい。

他方、今までの上記講義は、パナナのグローバル事業部経由であったが、ABIC講師の実績が評価され、社内での横展開も可能ではないかということで、同社の人事部より、グループ企業内人材教育の一環である、【異文化理解・コミュニケーション】の講義を初めて受託した。グループの今後を担う若手担当者を中心に研修を実施し、本件も満足いく結果を得た。

パナナは、若い社員が多く、皆はつつつとしていて活発、かつ風通しの良いオープンな社風と見受けられ、世間での評判通り素晴らしく動きの早い会社で、本件を最初からコーディネートしてきた当方も感銘すら受けた次第である。

このような関係を続けてきたおかげで、同社社長他幹部とも交流が始まっていて、2013年度はこれらの協力関係を深化させ、さらなる発展を期して努力していきたいと考えている。ABICはかかる活動を通じ、なお一層グローバル化が喫緊な現下の日本企業人材教育の一隅を照らすべく、確固たる地位を築いていきたい。

最後に、今までこの活動に携わっていただいた講師陣、候補者の積極的なご協力に対し厚くお礼を申し上げます。

ABICホームページのご案内

当センターホームページでは、活動の概要を紹介するさまざまなコンテンツを掲載しています。

ABICの情報源として、是非ご活用いただければ幸いです。

<http://www.abic.or.jp/>

自治体・中小企業支援

やまぐち産業振興財団・首都圏事業化支援 コーディネーターとしての活動報告

おおさか かずお
大坂 和夫 (元 住友商事)

私がABICのご紹介でやまぐち産業振興財団の首都圏事業化支援コーディネーターに任用されたのは2012年5月からで、現在に至っている。公募の分野が「機械関連」という条件となっており、42年以上にわたる社会人としての経験が、すべてほぼその条件に匹敵するということで応募してみようと考えた。1980年代後半の香港駐在時代、山口県、宇部興産の関連会社と一緒に、現在のパソコン用記憶媒体機器であるUSBメモリの役目をしていたフロッピーディスクを、香港で現地生産する会社を立ち上げた経験がある。その当時の関係者は、すべてがすばらしい方々ばかりであり、すくなく山口県には興味をもっていた。

2007年度から、ABICでは首都圏等、販路開発支援事業として、山口県内企業の製品、サービスの首都圏における販路開発支援をしている。

2012年度は、T社とM社がやまぐち産業振興財団から推薦され、5月より活動を始めた。T社は「防爆型自動充填装置」、M社はパテントをもった自社塗料での外壁塗装工事に多くの実績をもたれている。M社はすでに東京支店、神奈川支店をお持ちで、今後他の首都圏、埼玉県、千葉県等に支店拡大をめざしておられる。

T社は競合他社と比較して、ソフトウェアの技師を多くかかえておられ、顧客の個別仕様にこと細かく対応ができる。いわゆる「かゆいところに手が届く」きめ細かく、かつ迅速に顧客対応ができるのが特徴だ。これまで訪問した首都圏企業からはすべて高い評価をいただいている。いったん導入すると10-15年と使用できる機械であり、取り



株式会社エムビーエス・東京支社にて、担当者・吉田様
(写真右側)との会議後、2012年12月25日撮影

換え時期にあたる最終需要家が狙い目と考えられる。

両社に共通するのは、首都圏企業との面談機会取得までは、事前説明に少々時間がかかることである。インターネットが高度に発達し、資料もメール添付で迅速に添付送付可能な時代を反映しているためだと考える。また同時に、面談時には多くの質問を頂けるし、やはり今後どんなにIT技術が発達したとしてもFace to Faceの営業は欠かせないと思っている。

一番うれしいのは、面談後に、是非社内で検討したい、については追加資料を送付してほしいと依頼される時である。また、面談の日に追加して、別の日にもっと詳細説明会を開催してほしいと依頼される時でもある。

両社の担当者は若いのに商品知識が豊富であり、説明とPresentationが大変上手であり、やはり山口県には優秀な人材が豊富であるという強い印象をもっている。

教育

グローバル人材育成のための大学の取り組み

ABICはすでに一橋大学をはじめ多くの大学から英語での講義の依頼を受け、全講義数の約20%近くは英語での講義となっている。英語での講義のテーマとしては日本型経営、日米の自動車産業の比較、日本のICT（情報通信産業）の国際競争力、日本の電子産業の将来（一橋大学）などがある。

現在の大学の抱える大きな課題は、大学教育のグローバル化である。津田塾大学ではEU圏内やその他海外の大学との交流を深めるため、国際連携による教育の強化の取り組みを積極的に進めている。その一環として留学生と留学を希望する学生双方を対象に、英語による講義の充実が図られている。その1つ『グローバル化をめぐる諸問題についての英語によるインタラクティブな講義』プロジェクトの中で、今回はABIC会員が、現在の日本の経済界の中で大変ホットな話題の日本の電子産業の競争力について、韓国と比較しつつ講義したのでご紹介したい。

（大学講座グループ）

津田塾大学での英語による講義

しんどう てつお
新藤 哲雄（元 三菱商事）

ABICを通じた依頼により津田塾大学の学生に「日本と韓国の電子産業の比較」をテーマに英語で講義（2012年12月14日）を行った。

最初の自己紹介では学歴、経歴を数枚の写真で用意した。講義内容は、4つの観点から準備した。

第一には日韓の電子産業全体のバランスである。日本の家電企業は事業再構築中だが、産業向け・社会インフラ向け電子企業や電子部品企業は堅調だ。第二には歴史的観点である。韓国は戦後日本型モデルを追及したが、1997年の通貨危機以降は米国型モデルに転換した結果、光と影が存在する。第三はマーケティングで、韓国は英語のできる国際人材を養成して、世界の地域市場に対応しているが、日本は海外で出遅れている。韓国企業の成功事例では、米国でのTVの曲線デザイン、イスラム圏でのMecca phone（メッカ・フォン、一日5回の礼拝時にメッカの方向を示す磁石付き携帯電話）を紹介し、欧州でのブランド・マーケティングにも触れた。第四はイノベーションで、アナログからデジタルに移行して、製造が比較的容易になりコスト競争が激化したことだ。

講義の後で、大学から「学生たちから先生の講義は大変好評でした」との連絡を受けて安堵した。「また新しい知



教壇の筆者

識を増やすことができた」、「Mecca phoneなど、その国のニーズに応えた電子機器が興味深かった」、「日本はもっとグローバルな視点を持っていかなくてはならない」などの感想が学生から寄せられたのは心強く思う。オブザーバーとして参加したABICコーディネーター（サウジアラビア駐在経験者）には、Mecca phoneの説明時、イスラムのモスクから流れる礼拝の呼びかけ「アザーン」を実演してもらったことは実に効果的だった。

教育

小中学校国際理解教室講師体験「イギリスに学ぶ」

やまもと かずのり
山本 一徳 (元 パイオニア)

ABICより国際理解教室の講師のお話を頂戴し、新渡戸文化中学校、北区十条台小学校、そして板橋区第六小学校の3校で国際理解教室「イギリスに学ぶ」の講師を担当させて頂いた。

私が中学を卒業したのは1958年（昭和33年）、まさに「Always三丁目の夕日」の時代だ。貧しい日本に住むわれわれにとって、当時の欧米先進国は憧れの的で、海外に雄飛することを多くの若者が夢見る時代だった。私自身が欧米に対する強い憧れをいだき、欧米に追い付き追い越せの先兵の一人として海外で25年間仕事をし、多様な価値観に接し多くの得難い経験をした。

私と同じ様な体験を多くの若者にして欲しいという思いを日頃から持っていたので、今回の講師のお話をお引き受けした。そして、一人でも多くの生徒に「海外に対する興味を持ってもらうこと」を狙いにして授業内容を組み立てた。

現在の若者は海外に対してあまり関心を持たないといわれる。それは若者の無気力や無関心が理由ではなく、日本が物質面では欧米先進国に追い付いた結果、もはや欧米は先進国でも憧れでもなくなったことが最大の理由だろう。今の若者に海外に目を向けさせるためには、別の動機付けが必要だ。

イギリスが学習の対象に選ばれたのは、2011年のウィリアム王子の結婚、2012年のエリザベス女王即位60周年記念、そしてロンドン・オリンピックと、大きなイベントが続き、イギリスに対する関心が高まっているためだと思う。

ロンドン・オリンピックの録画映像の一場面を見せたり、パワーポイントにはできるだけ多く画像を使うなどして、生徒の興味を引きつける工夫をした。具体的には日本とイギリスを対比させ、共通点と相違点をあげて考察した。

きちんとした自分の意見を持つと同時に、他人の異なる立場・意見も尊重する良き個人主義を社会基盤とし、伝統を大切にしながら常に革新を求める姿勢、日常と非日常のメリハリを付けて人生を楽しむ姿勢、自然保護活動、慈善活動の推進等々、イギリスを語るのに枚挙のい



板橋区立第六小学校での授業風景

とまがない。

物質面では欧米先進国に追い付いたとはいえ、精神面や社会構造面ではまだまだ改善、強化の余地が残されている。特に失われた20年を経験し閉塞感が漂う今、日本人が自信を取り戻すためにも、欧米から謙虚に学ぶことが必要だ。また、海外から眺めると改めて日本の良さにも気が付く。日本の良さを再認識して誇りに思い、それを守ることも大切だ。

「教えることは学ぶこと」今回の授業を前に過去の記憶を思い起こしたり、関連書籍に目を通したりしてイギリスについて考察し、日本の現状に思いを巡らせた。日本でも「教育の改革」が話題になるが、その必要性と緊急性をあらためて再認識した。イギリスのしなやかさ、したたかさの根底には多様性に富んだ良質な教育システムがあるように思う。

2012.12.26の日経新聞で「日本人学生の海外留学に回復傾向が出て来た」という記事を目にした。われわれ海外経験者が今回のような特別講義を積み重ねることにより、さらに多くの若者の目が海外に向けられることになれば大変喜ばしい。

貴重な機会を斡旋して指導頂いた ABIC関係各位にあらためて感謝したい。

ABICの留学生支援活動

お台場の東京国際交流館（以下「交流館」）はABICの留学生支援活動の拠点だが、その上部組織、独立行政法人日本学生支援機構（以下「機構」）は2010年、行政刷新会議の事業仕訳をうけて、留学生への宿舍提供業務からの撤退と全国13カ所に保有する留学生用“国際交流館”の2012年3月末廃館を発表、一部のメディアはエリート留学生寮の事業仕訳と揶揄した。

交流館はABIC誕生まもない2001年に、グローバルな知的交流の整備という政府の「国際交流大学村」構想のもとに開設された。大学院生以上の留学生・日本人学生や研究者およびその家族受け入れのための800を超える居室に加えて、共用の自習室、ラウンジ、体育室、トレーニングルーム、美術室、音楽室、茶室、調理実習室、食事室、プレイルーム、レクリエーション室、日本語研修室、多目的室などを備え、隣接するプラザ平成では同時通訳ブース付き国際会議場、メディアホール、研修宿泊室などがある、国内随一の国際交流施設である。高度人材の獲得競争が世界で激化する中、世界中の優秀な大学院生や研究者に、質の高い生活や交流の場を提供するべく、国策の一環として設立された。

ABICは日本国際教育協会（現 日本学生支援機構）からの協力要請をうけて、設立当初から支援活動を始め、現在、週に18クラスの「日本語広場」と、週末の茶道、華道、書道、囲碁、将棋、空手クラスの「日本文化教室」の開催のほか、ABIC会員や支援企業の提供品によるバザーの定期開催など、さまざまな支援や交流活動を行っている。また、2006年からABIC会員や地域住民の協力のもとにボランティアチームを組成して、妊娠・出産・育児・健康相談・検診・通院・治療などの家族の健康管理や通園・通学手続きなどの生活支援にも注力しており、2012年3月ま

での1年間には101の活動案件に128名のボランティアが参加、交流館のABICプログラムに参加した留学生は年間3,000名を超えた。

ABICは留学生支援だけでなく、小中高校での国際理解教育や在日外国人子女の日本語教育支援、生活者としての外国人の日本語教育のための教師養成講座、大学教授・講師・職員や留学生施設職員等への人材紹介など、外国人支援事業を幅広く行ってきた。理事長や事務局長は文科省委嘱の委員会活動などを通じて、産学共同での国際人養成施策の強化や地域との連携による留学生交流拠点作りなど、積極的に留学生支援に関わっている。

交流館入居者のほとんどはアジア・中東・旧ソ連圏諸国からの国費留学生で、東京大学や政策研究大学院大学など国内の一流大学や研究所に所属しており、帰国後は母国の内閣府、議会、財務省、外務省、内務省、中央銀行、公正取引委員会や国税庁などで、国を支える重要な役割をになう知日派エリートで、日本の一流企業に就職する者も多い。

交流館の廃館決定に対して、現居住者たちだけでなく世界中に5-6,000名におよぶネットワークを持つ交流館卒業生が、署名運動やさまざまな形で立ち上がり交流館の存続を働きかけた。そうした活動が奏功してか、廃館直前の2012年1月になって、4月以降の猶予期間として2年間の継続が認められることになった。しかし運営の現場の混乱は今も尾をひいており、1年後に迫った猶予期間切れの先行きは不明である。

日本は在日留学生が1万人であった1983年に留学生10万人計画を発表、20年後の2003年にやっと10万人を超え、2010年には14万人に達したが、その後陰りを見せ13万人台に落ち込んだ。国内学生に対する留学生比率は、欧米の留学生受け入れ先進国の半分にも至っていない。2008年には留学生30万人計画を発表し政府の成長戦略に盛り込まれているが、そこに達するための道筋はまだはっきりとは見えてこない。

優秀な留学生の獲得や知日派留学生の養成は、企業の人材確保の後押しというより、国の競争力強化のための国家戦略に他ならない。留学生にとってより魅力ある国になるための日本の課題は多いが、住居の問題は、奨学金制度や大学の質の問題などに劣らず重要だ。国際交流館廃館をめぐる混乱は国全体から見れば些末なことかもしれないが、僅かな数とはいえ、影響を受けた留学生の心には一貫性を欠く日本の政策の苦い思い出として染みついている。

（留学生支援グループ）



私の ボランティア活動

68歳からボランティア！

いなば だいさく
稲葉 大策 (元 小松製作所)

長年のサラリーマン勤務を終え、やっとラッシュアワーに巻き込まれない生活が訪れた。毎日家に居て、長年の海外勤務から持ち帰った品物の整理に移った。これは〇〇国の大臣からプロジェクトの完成を記念して贈られたものだ、これはXX国の市場で値切って買ったものだ、といった思い出に浸り、あつという間に2-3か月が経過した。

そんな時、日本技術士会の仲間から、「稲葉さん、貴方にピッタリな仕事がありますよ」と「JICAのシニアボランティア」を紹介された。それは、南米ボリビアのサンタクルス県庁で地域開発計画を支援するというものであった。「地域開発計画」という専門分野で技術士の資格を取得した私にとって、先方の要請内容はピッタリのものであり、もう一度海外で仕事をしてみたいという意欲が湧き出し、それではと受験したところ幸いに合格した。大学を出て、サラリーマン生活を始めた時には、定年を迎えた後は悠々自適の生活を送るような人生かな、と思っていたのに、68歳になって海外に単身赴任するとは思ってもいない展開であった。

これより2年間のボランティア生活が始まったが、現役の時と比べてボランティア生活は精神的には楽で、とても楽しいものであった。何と云っても「ボランティアにはノルマがない！」のだ。陽気なボリビア人の間では、ボヤっとしているとジョークで酒の肴にされてしまうので、休憩時間やアフター・ファイブの方が、相手の言っていることに気を使い、しっかり聞いていた気がする。68歳でボリビアに赴任し、70歳の誕生日を



よこはま国際フェスタにおけるワークショップ風景

現地で、単身で迎えた。2年間の勤務であったが、帰国時には3か月位しか経っていないような感じがした。

帰国後、日本技術士会の社会貢献委員会の委員を勤める傍ら、シニアボランティアの先輩達が立ち上げたNPO法人シニアボランティア経験を活かす会に入会し、学校等での理科教育や国際理解に係わる出前授業に、準備や打ち合せも含め週3-5日を費やしている。特に朝5時10分に家を出て3時間をかけて通勤する週一回の大学の講義では、80-100人を相手に、90分を立ちっ放し、しゃべりっ放しの重労働を8年間も続けている。以前は私が外出することを歓迎していた家内だが、最近では「外でばかりボランティアをしないで、たまには私にもボランティアしてよ！」と言い出した。そろそろ社会でのボランティアを卒業する時期かな…？

ボリビアに於ける現地調査



露营地



滝を登るためのバイパスの梯子



岩場ルートへのトラバサ

私の ボランティア活動

キラキラな国のきらきら☆滞在記

ふじおか ますえ
藤岡 益恵 (元 財団法人大阪城ホール)

「人生とは、何かを計画しているとき起きてしまう別の出来事のこと」と言いますが…。

そう、それは定年退職して数年後、大きく生活を変えようと計画していた2011年2月某日。大阪のカフェで、技能ボランティア海外派遣協会（NISVA）の方から「インドネシアへ行って貰います」と言われた。「えっ、この私がインドネシアへボランティアに!?!」

そして2011年11月、シニアボランティアとしてインドネシアの首都ジャカルタに赴任した。夜到着、車で向かう宿舎までの一般道路は沢山の自動車、バイクで、道路端は人、人、人、そしてさまざまなお店や屋台で一杯だ。パワーに満ち溢れている。「やって来ました!」そして翌朝4時過ぎ、大音響に直撃され飛び起きた。コーランだった。顔を洗いに歩くと、何かを踏んだ。むかでだ。そして壁にも大きなやもりがぺたっと。「ひえー!」驚き、おののいた。こんなびっくり歓迎を受け、私のインドネシア生活がスタートした。

受け入れ機関はYMG（松下幸之助氏とM.ゴーベル氏がインドネシア国民の幸福と知的生活の向上発展に寄与するため設立した財団）、任期は1年。活動は、近隣の子供への新規日本語指導プロジェクトに携わることで、私は初代の、たった一人の新任教师だ。派遣決定時より「頑張らねば」と思ってきたのが、なお一層力が入った。けれど最初に受け入れ先とのコミュニケーション不足からくるトラブル発生! 「話が違うやん!」という事態に。あれこれ悩んだが、結局私の当初の認識どおりとなり、ほっとした。その折に出会ったのは、「慌てず、焦らず、当てにせず、しかして、飽きずに、あきらめず」という言葉で、しっくりときた。

そう、インドネシアは“キラキラ”（アバウト）の国、きっちり正確にという日本の感覚でいると、こちらが疲れる。結構大事なことも大雑把で、よくこれで事務が、会社が廻っているな!?!と思うこともしばしばである。（でもいけているのが不思議!）人々とはといえば、一様に穏やかでとても親日的だ。任期中、日本人というだけで親切にされたことはあっても、嫌な目には会わなかった。そしてほとんど



中学生クラスの生徒と。それぞれの名前をお習字で書いてもらって「ハイ、チーズ!」

がイスラム教信者である。赴任して間もない頃、自作のカレーをランチに持参し勤めたところ、「お肉は?」と聞かれ、「豚」と答えると、全員にお断りを受けた。お酒も口にしない。でも概して健啖家だ。

日本ブランドは尊ばれており、特に路上の自動車、バイクはほとんど日本製品だ。さらに電車は日本のお古で、キラキラな国では「新宿行」のプレートを付けたまま走っている。私は、どこか懐かしさを感じさせる現地にごく自然に溶け込んでいった。

活動の方は、生徒全員初心者のため、教科書を作成後、指導を開始した。クイズ、ゲーム、歌など遊びを入れ学ぶ。教室では「バグース」（素晴らしい）「グッド」「あかんあかん」（私は大阪育ちである）などの言語が飛び交う。9才の男の子はゲームが得意でひらがなを覚えた。

最終的に全員が教科書1冊目を終了し、テストも合格してくれた。「バンザイ!」ちなみに私が作成した教科書は3冊で、タイトルは『かけはし』である。将来子ども達に日伊の架け橋になってほしいと願い名付けた。また、教室外でも日本語に興味のある人々、宿舎近くでよく会う若者達や食堂のおばさんと、日本語の挨拶を教える「課外授業」で繋がった。

辛い食べ物に辟易し、突然の停電・断水に「何すんねん!」と怒ったことも懐かしい。かけがえのない、おびただしい思い出の数々に、沢山の素晴らしい人々との巡り会いに感謝!

「思いの力」そして「感謝の心」の大切さを実感した貴重な一年間だった。

エッセー

歌は世につれ年につれ

さとう とおる
佐藤 徹 (中小企業支援担当コーディネーター、元 伊藤忠商事)

海外での出稼ぎからの帰国直後に悪性腫瘍に襲われ、手術後のリハビリを兼ねて学生時代に少しやった男声合唱を復活した。今では混声合唱団3つ(1つはこの4月公演で解散)、男声合唱団1つに所属し、昨年からはプロの個人レッスンを受けているので週に3-4回は歌う機会がある。

もともと合唱はキリスト教の教会音楽を発祥とするが、日本では明治の小学校教育に導入され、今では東京混声合唱団等のプロの合唱団ができるまでに発展している。

合唱の良いところはまず第一に、歌うことで口腔、肺、内臓などを刺激して脳が活性化することだ。もっとも脳の老化のスピードの方が早ければ、老化を若干遅らせる程度の効用しかないが…。第二にはハーモニーの美しさ(うまくハモるといふ)による感動だ。これは練習のとき、あるいは舞台上で演奏するときでも、うまくいけば何ものにも代えがたい感情の高まりがあり、聞く人に感動を与える喜びだ。第三には歌う仲間だ。いまだ現役で仕事をしている団員もいるが例外的で、ほとんどの団員は65歳以上の年金生活者だ。団の構成員は、それぞれ長い年月をさまざまな分野で活躍してきた人達なのでそれぞれに個性があるが、波長のあう仲間がいると親しくなり、歌の舞台になった場所などへ一緒に旅行したりして面白い。

反面悪いところというか問題もある。第一に、合唱は決して一人では成立しないことだ。少人数の団だと7-8人からあるが、東日本大震災で天井が落下した(幸い観客がいなかった) ミューザ川崎の改築記念公演として、4月末にマーラー作曲「交響曲2番復活」を歌う混声合唱団は200名(筆者もその一人)だ。多様な人間がいるのは良いことなのだが、複数の人間がいると必ずイサカイが起こる。これが深刻化すると団が分裂したり消滅したりする。

問題の第二は、結構金がかかることだ。合唱団の構成は通常主宰者、指揮者、団員で成り立つが、主宰者(指揮者を兼ねることが多い)というのは団の



運営(主にお金に関連すること)と音楽についての決定権者である。また団員の総意で団が運営されるパターンもある。団員数の多い常設合唱団はこのパターンが多い。特に後者の場合意見がいろいろあってもめることがある。団の運営に必要な資金は団員によって支払われる団費で賄われるが、指導者(指揮者)の質、練習回数の多少、練習会場の質・立地条件等で団費の金額が変わる。だいたい月に1,500-5,000円が相場で、コンサートホールを借りて演奏会をやる場合やプロによるボイストレーニングがある場合は別途支払いが必要になる。複数の合唱団に属していると結構馬鹿にならない金額になる。

第三の問題点は、多くの素人合唱団が直面する団員の高齢化と新陳代謝が進まないことだ。われわれの学生時代は娯楽の種類も少なく歌う人口は結構あったのだが、今や大学によってはグリークラブ(男声合唱団)が成立しないこともあると聞く。団員は年をとるのに後釜が入ってこないケースが多くなってくる。

最後の問題として暗譜(楽譜を見ずに歌うこと)がある。年とともに記憶力が衰える中、音の高低、長さ、強弱、歌い出す場所などを覚えるだけでも大変なのに、歌詞も覚えねばならない。日本語ならまだしも英語、ラテン語、フランス語、イタリア語など多様な外国語を覚えねばならない。先述のマーラーの曲はドイツ語の暗譜だ。頭が痛い。

何歳まで歌えるのか?(その前に何歳まで生きられるのか、という問題があるが)はさておき、今日も厳しい練習指導へと足を向けるのだ。

事務局だより

ABIC会員懇親会を開催

2013年2月19日(火)18時～19時半、浜松町のメルパルク東京において会員懇親会を開催しました。正会員、活動会員並びに日本貿易会関係者など約170名の参加を得て、槍田会長の開会挨拶に続き、市村理事長の活動報告および乾杯発声の後、活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



槍田会長開会挨拶



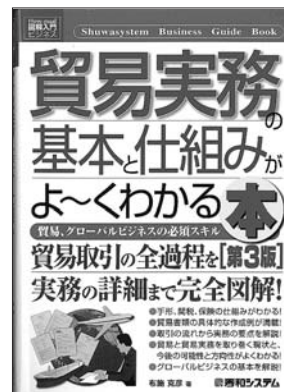
市村理事長乾杯発声

新刊紹介

『貿易実務の基本と仕組みがよ〜くわかる本』2012年8月6日刊

『貿易書類の基本と仕組みがよ〜くわかる本』2012年9月1日刊

ふせ かつこ
布施 克彦 (ABIC会員、元 三菱商事) 著
秀和システム刊 定価1,500円+税



本書2冊は、2004年と2005年にそれぞれ初版を刊行以来、今回で第3版となる。ビジネスのグローバル化によって、貿易の実務に携わる人が増えているという追い風もあり、幸い版を重ねている。これらの本は、貿易実務の過程と、それに関わる書類の内容と機能を淡々と説明している実用書で、貿易実務の入門書的な内容のものだ。前書第2版（2008年、2009年刊行）の内容に基づき、以降のルール、手続きの変更や世界貿易の情勢変化などが書き加えられている。

筆者は現役時代、三菱商事で主に鉄鋼貿易業務に従事してきた。貿易実務には精通したつもりでいたが、実際に貿易実務全体の解説書を書くとなると、未知の部分や、間違っって解釈していたり、解釈があやふやだったりする部分が多くあった。幸いABICの仕事で、社会人向けセミナーにおける「貿易実務」の講師を務める機会があり、そのための準備をすることで、貿易実務全体を改めて勉強したことが、この本を書くきっかけとなった。

そうはいつても、実務を離れて長年を経ている筆者が、実務について書くことには、内心忸怩たる思いを禁じえない。特に近年は貿易実務にもIT化の波が押し寄せていて、筆者自身がまったく経験していない実務が多くなっている。変わりゆく実務については、関連業界の方々に教えていただいたりしており、筆者が実務に携わっていた頃との大きな違いを感じている次第だ。

会員の皆様がもし何かの機会に貿易実務に再度携わる機会があれば、本書を手にとりいただき、至らぬ点などあれば、ご指摘いただきたいと思います。

会員の種類

種類	内容	年会費
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正会員

団体・法人（18社）〈社名五十音順〉

〈10口〉（一社）日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)
 〈1口〉 兼松(株) 協同木材貿易(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（9名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男
 岡 素之 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫 〈3口〉 小林 栄三

賛助会員

法人（3社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ キーリサーチネット(株)

個人（378名）

下記は2012年11月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力を深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)
 〈2口〉 新妻 純一 細井 進 松井 史郎 松尾 謙二
 〈1口〉 小笠原 明生 加地 潤二 白井 俊和 坂野 正典 堀 英一 三好 賢治

活動会員 2,304名

(2013年2月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp